２０１１年度　特別支援教育研究委員会　総括

Ⅰ．本年度の目標

「気になる生徒」に向き合うため、教員の「気づき」、「相談」、「接遇(アテンド)」にかかる資質を向上させる。小中学校在籍時には特別な取組がなく、かつ専門医による診断等もなされていない「気になる生徒」に対する個別の支援をスタートさせるための方途を研究する。

Ⅱ．本年度の活動

①　５月２７日（金）橿原市中央公民館
②　６月２４日（金）橿原市中央公民館
③１０月２１日（金）奈良県解放センター
④１１月１１日（金）奈良県立奈良西養護学校
⑤　１月１３日（金）奈良県立橿原公苑

○第１回　特別支援教育研究委員会
・座長・副座長（代行・記録）の選出
座長　新保（西大和学園）　代行　駒田（大宇陀高等学校）　記録　竹川（奈良女子高等学校）
・今後の活動方針の確認
研究テーマ「高等学校における特別支援教育について」
・各校の実態報告
各校の校内委員会にかかる生徒や療育手帳･診断書のある生徒以外に､｢コミュニケーション障害｣、「板書がとれない」、「漢字が書けない」、「無気力」など、相当数の「気になる生徒」が存在することが報告された。

○第２回　特別支援教育研究委員会
・ビデオ視聴研修（午前）
クローズアップ現代「軽度発達障害のより良き理解のために」、「アスペルガー症候群～企業の取組～」を視聴し、発達障害についての基礎的な知識の理解を深め、就労支援の方法について学ぶことができた。
・事例研修（午後）
奈良教育大学特別支援教育研究センターの河合淳伍先生「高等学校における発達障害の理解」について講演していただき、どのような生徒が対象になり、どのような取組が必要であるかを学ぶことができた。次に、青翔高等学校の前田隆敏先生に「M君への特別支援の取組」について報告していただき、校内での友人関係作り・支援体制作りの大切さや、幼稚園・小学校・中学校及び地域との連携の大切さを学ぶことができた。

○第３回　特別支援教育研究委員会
・記録シートを用いた「気になる生徒」についての状況把握
担任が早期に「気になる生徒」の様子を把握し、その初期段階の対応ができる整理シートを考案するため研究協議を行った。その際、他府県の様式等を参考にした。
・ビデオ視聴研修・意見交換　「軽度発達障害のより良き理解のために～ＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症～」から第３巻「学び続けるために～高校教育での支援を考える～」と第４巻「就労支援～社会的自立を目指して～」
・事例研修・指導助言
奈良教育大学　岩坂英巳先生による事例研修。２例をもとに、症状についての理解を深めた。また、各学校で取り組んでいる「気になる生徒」への対応や、保護者への対応についても助言をいただいた。早期発見、早期対応の重要性、専門機関との連携や教師の資質向上の必要性などを理解することができた。また、特別な支援が行われていないが、必要であろうと思われる数多くの生徒への対応の必要性を確認することができた。

○第４回　特別支援教育研究委員会
・奈良県立奈良西養護学校での研修（各クラスへの入り込み　１クラスに１名）
　各先生が適切に目配り・声かけをして授業されている姿から、適切な声かけのスキルが高校の授業でも必要であることや症状別の縦割りクラスは、高校における習熟度別授業を行う際の見直しに参考となるものであった。
・研究協議　奈良西養護学校教頭　中村美和先生　講義　ディスカッション
　各症状別の、子どもの行動特徴について、詳しく学んだ。高校にも広汎性発達障害の特徴を持つ生徒が想像以上に多く、身近にもいるのではないだろうか。このような生徒へのきめ細やかな指導・配慮・能力開発を盛り込んだ授業を開発することが必要な時期に来ているのではないか。また、「大人がこだわらないことが大切である。」という教頭先生の言葉が印象的であった。
・研究協議　奈良西養護学校の先生方とのディスカッション
　想像以上に、地域社会や地域内の教育機関に開かれた存在であり、個々の先生方も熱心に取り組んでおられる。高人教としてももっと連携・協力を強化し、県内各高校からもつながりをしっかりする必要があると思った。「気になる生徒」の個別の相談にも乗っていただけることがわかり、たいへん心強く感じた。

○第５回　特別支援教育研究委員会
　本研究委員会の活動等について、まとめと総括を行った。

Ⅲ．成果と課題

【成果】
・研修を通して、発達障害への理解がより深まった。
・ビデオ視聴により、生徒のコミュニケーションスキル・ワーキングソーシャルスキルを伸ばすことで、「社会で暮らしていく力」をつけさせる取組が必要であるとわかった。
・専門医のアドバイスを直接聞くことで、具体的な事例研修ができた。数名のコーディネーターも参加した。
・奈良県立奈良西養護学校で研修ができた。午後の講演・ディスカッションも有意義であった。
・各学校で利用可能な「担任の気づき・発見シート」を作成した。

【課題】
　センター的機能を有する特別支援学校を中心に、コーディネーターの資質向上の機会を持ち、中学校・大学等その他の学校・事業所との連携を深め、専門医の意見を聞く機会を持つこと。また、各校においては、当研究委員会で研究した「担任の気づき・発見シート」などを活用し、生徒の実状を把握し、各学校での支援体制の確立に寄与していくことが今後の課題と考えられる。